

【溺愛開発SEX】おじ様バーテンダーの指先調律
く不感症で振られた私が、イケオジの指先で強制絶頂♡
身も心もトロトロに溶かされ堕とされる話く

サンプル（一部抜粋）

「ごめん、別れて。」

休日自宅。

やる事をやった後に彼氏にそう告げられた。

「いや、前から思ってたんだけど…マグロすぎない？」

「ま…ぐろ？」

「濡れない、声も出ない、いつも眉間に皺よせてさ。」

正直萎える」

萎えずにイったくせに…って文句はぐっと飲み込んだ。

「…ごめん…その、頑張って声とか出すようにしてみるから…」

「いや、もういいよ。元カノと寄り戻せそうだし。って事で…じゃ。」

服をさっと整えて振り返る事もなく出て行く彼氏…。

こんな時は私の避難所に行くしかない。行き先は近所のバー。

「いらつしゃい。理沙ちゃん」

カウンターの内側でグラスを磨くのは、五十二歳の優しいおじさん店長。馴染みの顔を見ると気持ちグッと緩んで、涙がぼたぼたと垂れてきた。

「…マグロじゃなかったらなあ…」

酔っぱらって、今自分が何を話しているのかも分かっていなかった。

「…相手がきつと悪いんだよ」

店長の小さな声が聞こえる。

「店長…どうすれば気持ちよくなれるんですか…」

教えてくださいよ……」

そのまま私は眠りに落ちてしまった。

目が覚めると、私は店内のソファで店長の膝を枕にして髪を撫でられていた。にへつと笑うと、店長が私の手をぎゅつと握り返してきた。

「…こんなに可愛いのにね」

反対の手で頬をなぞられる。少しくすぐったくて心地良かった。

「おじさんの直感だけど。多分、マグロじゃないと思うよ」

口角は上がっているのに目の奥は笑っていないような……そんな店長の表情。

「……例えばね」

店長はゆっくりと片手で私の手を握ったまま、反対の手で私の首筋をそつとなぞった。

「女の子にはね。沢山性感帯があるんだよ。

敏感な場所だけ責めれば良いわけじゃない。

突然キスをして胸を揉むような若いセックスじゃ、気持ちよくなれなくて当然だよ」
首を撫でる指が鎖骨へとゆっくり落ちる。

「……座れる？そんな事ないって教えてあげる。ちよつとだけね」

言われる通りに店長の膝の上に乗る。

店長はそのままそつと優しく私を抱きしめた。

「……カクテルと同じだよ。

じっくり温度を上げれば、いい香りがしてくる」

耳元で低くそう呟いて、耳を優しく指で撫でた。

「ひあ……」

ぞくつとして思わず声が漏れて……そんな自分に自分が一番驚いた。

店長はゆっくりと私のニットの手に手を忍ばせた。

まだ胸にも触れられていないのに、身体が少しずつ敏感になっていくような変な感覚。

「ニットの裾を自分で持って。僕に見せて」

逃がさないような視線。

私は自分のニットの裾を持ち、顎の下まで捲し上げた。

ずっと背中側にまわった手でパチンとブラのホックを外された。

乳輪に指の先を添えて、ゆっくりと円を描くように撫でられる。

それでも乳首には触れない指先が、なぜか少しもどかしかった。

「…理沙ちゃん、乳首、触ってほしくなっちゃった？」

不感症だったのにね。触ってほしいならちゃんと行ってごらん」

いつもよりも意地悪な雰囲気、大人の色気と余裕。

「素直になれなくてもいいんだよ。どれだけ意地を張ったって、無駄だから。

それを教え込んであげる」

ぐるぐるとネクタイで目隠しをされ、私の視界は真っ暗になった。

見えないからか、店長の指が身体に触れるだけでびくっと震えてしまう。

「…いいよ」

その言葉とともに、乳首を優しく指で撫でられた。

「ああ…あ…は…」

店長の舌がコリコリと乳首を弄ぶ度に身体がびくつと震え、お腹の底がぐつと熱くなつて…声が止まらなかつた。

「…ほら、そろそろ店を閉めるから帰りなさい」

さっきまで執拗に攻めていたのに、突然突き放したような態度。

「こんな枯れた年上のおじさんじゃなくて、もう少し若い人と良い恋愛をしてね」

身体の疼きを抱えたまま、気が付けば二週間が過ぎていた。

△そんなある日、家に来た元彼に強引に押し倒され、ローションを塗られる▽

「やだ、いや…やめて…」

当然のように何も感じなかつた。

ヒクヒクと泣くばかりの私を見て、元彼は不満そうな顔をしていた。

「こうやってお前の乾ききつた砂漠をどうにかしようと思って、ローションまで持ってきたのにさー」。

あーあ、萎えた。」

吐き捨てられるようにそう言われ…元彼は私の家を出て行った。

しんどいな。店長…助けて…。

行き先は…バーしかなかった。

「店長…助けて…

自分でシても気持ちよくなれない…

元彼に触られても何も感じなかったんです…

店長の手だと気持ちいいのに。もう…やだ…」

店長は私の頬に手を当て、上を向かせた。

「…隙がありすぎだよ」

店長は小さくため息をついて、強引なのに優しく入り込んでくる舌でキスをした。

「助けてあげる。

僕が全部」

店長はドアを閉め、鍵をガチャっとかけた。

「…僕は良い恋愛をしてねって言ったんだよ。

前以上に君が傷ついて戻ってくるなんて想像もしていなかったよ。

くだらない男に傷つけられるくらいなら、僕が壊してあげる」

「…ローション？」

元彼にされたことを報告すると、店長ははあ…とため息をついた。

「…何も分かってないな。そんなもの、必要ないのに」

「…どうして、乳首がもう立ってるのかな」

くすつと笑いながら胸の周りをなぞられる。

早く中心を弾いてほしくて、自然と腰が浮いた。

「…抵抗しないでね。今からどれだけおかしくなろうと」

店長は私の両手をネクタイでぎゅつと縛った。

ソファへとゆっくりと押し倒され、グチュグチュと舌が入ってくる、頭がしびれるようなキス。

「…無邪気な煽りは危険だよ」

店長はじゅるつと音を立てて私の乳首を吸った。

「や、ああ…：：：気持ちいい、ああ…：：：」

「…おかしくなっちゃう…：：：なんで…：：：店長にだけこんな…：：：」

「…前に乳首を開発してから二週間、かな。」

理沙ちゃん、一人じゃ満足できなかったでしょ？

会いに来なかった時間、与えられない感覚を求めてずっと身体がくすぶっていた。つまり…調教は二週間前から始まっていたという事だ」

片側の口角を上げ、執着に満ち溢れた目で私を見下ろす店長。

「…ねえ。砂漠…だっけ？確かめてみようか」

店長はクスッと笑ってようやく下着を完全に脱がせてくれた。

「…余計なものを。」

こんな人工的なローションなんてなくても、しっかりと濡れているのに」
ローションのついていない膣の入り口をくちゅつと指でなぞった。

「…この邪魔なローション、洗い流しちやおうか」

ゆっくりと膣の中に指を一本入れた。

「あああ…あ、ああっつ」

指は動かしてない、ただ押し上げられるだけ。

なのに身体の内側からびりびりとしびれるような…言葉に出来ない快感が流れた。

「…中、痛くないね？指、増やすよ」

ぐちゅつともう一本侵入してきて…そのまま気持ちのいい場所をぐつと押し上げられた。
「…綺麗にしようね」

トントンと押し上げるように中を、お腹のもつと内側を押し上げられた。

「ああ…なんか、あつ、やば…ば…あああつっ」

ブシャッと激しい音が鳴り響いた。

「…もつともつと出さなきゃ、洗い流せないよ？」

拒絶する隙すらも与えず、もう一度指を二本挿入した。

「あああつ、やつ、トントンやだ、

あああ~~~~~♡♡」

さつきよりも容易く、またブシャッと蜜が飛び散った。

「ほら、まだまだ」

店長はローションに蜜を重ねていく。

「覚えた？ 僕に愛される感覚」

妖艶な瞳を見るだけで、身体がドクドクと脈打つを感じながら、私は何度も頷いた。

「そう。いい子だね。」

じゃあ次に進もうか」

店長はゆっくりとベルトを外し…今まで隠されていたソレをあらわにした。

「や…あ…店長…」

私はどうして足を広げてしまっているんだろう。

「イれて……ください……」

全部、店長の思惑通りに動かされていく。

グチュッと生々しい音を鳴らしながら、ミチミチと侵入してくる音。

私の中が店長の為に書き換えられていくような……そんな感覚だった。

……店長のは……あんなに大きいのに全く痛くなくて、あの乾いた摩擦感もなく。
ぬるっと吸い付いて押し広げられていくような……快感が身体に走った。

「……ああ……っ、中、あ、気持ちいい……あ……」

「次は……奥でいく練習をしようね。」

店長はニコッと微笑むと奥に亀頭を当てて、馴染ませるようにぐりぐりと優しく回すように腰を動かした。

その瞬間、

「うあっ、あっ、あっ」

喉の奥を締め付けられるような、深くて込み上げてくるような快感にのけぞった。

「逃げちゃダメ。」

（全容は製品版にて）